
異界の界

lukewarm

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の界

【Ζコード】

N4773R

【作者名】

lukewarm

【あらすじ】

世界は物語で成り立つ。
故、世界は物語を欲す。

異界の界　　ここは異世界への門。

力を求める者に力を与え、知恵を求める者に知恵を与える。そしてその者から対価を求める。

ここに一人の少年が来た。

少年は言った。

「俺の記憶を払う。それで俺に、力をくれ」
物語の種を持つ少年が、異世界へ舞い降りた。

不定期更新です。思いつきで始めてます。短いのをちょくちょく

書くかもしれません。結局不定期です。

世界

世界とはどうやって存在するのだろう?

それは物語だ。

世界は物語で成り立つ。

物語がなければ世界は成り立たない。

ここは、この世界にある異世界だ。

世界の中に物語を担当する異世界を包含する」とで、世界の崩壊を防いでいる。

逆に言えば、そこに異世界 物語があるからこそ、この世界は存在している。

だがどうだらう?

異世界の物語。それは無限に続き、無限に生まれ、無限に語られるのだろうか?

否。

物語は生まれ、収束し、そこでその世界の物語は終わる。終わつた世界の新たな物語は、その多くは、読み手の期待に添えず失敗する。

それを防ぐには。

物語の種を 完結した世界ではなく外の世界から呼ぶ。ここに呼ばれるのは、死が確定し、この異世界を満ちさせる物語を紡ぐことのできる人間だ。

『欲せ。

対価を払え。

されば汝に、望むものを与えよ。

そうして世界に降り立ちよ。

古き世界での死を対価に、新しき世界での生を得よ。

ここは世界の門 異界の界。

新たな世界への、旅立ちの扉』

それを伝えることが、この異界の界の役割。
まあ

望め。
払え。

それは平凡な日常だ。

いや、日常だったと言つべきだろう。

朝起きて顔を洗い、コンタクトを入れ、食事をし、電車に乗り、四駅先で降り、歩いて高校に行き、ラノベを読んで授業を聞き流し、購買で菓子パンを買い、友人と戯れながらパンを食べ、昼寝して授業を聞き流し、歩いて駅まで戻る さなか。

トラックに撥ねられる。

迫るトラック。

ああ、死ぬのか。

淡々と、そんなことを考える。

走馬灯なんてなかつた。

だつて俺には、そんな未練なんてなかつたから。

現実は残酷だ。

俺は何かにぶち当たり、そして絶望した訳じゃないけども。

現実は残酷だ。

現実には何もない。

俺の大好きな魔法や、超能力や、神や悪魔なんかはこの世にいない。

だから、死ぬならそれまで。

未練はない。

生きれるならその方がいいけど、無理なら諦める。

魔法や、超能力や、伝説の生物なんかがいないなら、来世や天国なんてあるはずないのだから。

だからこの死を受け入れる。

ああ、なんで死ぬんだろう。

いつも通り生きて、いつも通り退屈な毎日を過……」

た……の……に……

……最後、俺が信号無視したんじゃないか。

そもそも、手元の本ばかり読んで信号自体見てないや。

なんだ、自業自得か。

そう考えると、本当に未練がなくなつた。
トライックの運転手さん、事故起しきせて、本当にすみませんでした。

刹那 世界が暗闇に変わる。

闇は地面から湧きだし、俺を呑みこみ、暗闇へと放り出した。
闇。

それに俺は、歓喜を覚える。

それは、ないはずの“何か”だつたから。

「やあ。来たね、物語の種」

その男は闇に浮かび上がるようになに存在する魔しき青年。

片手に分厚い本を持ち、不敵に笑っている。

「ここが何なのか、気になつていいやつだね？」

頷く。

「では教えてあげよ。ここ そしてこの世界について……

生死の境

対価を支払え……か。

「質問、いいかな？」

「どうぞ」

「あなたは、何だ？」

すると青年は考へるよう上を向き、

「そうだね。世界は眞実を語ることを求めているよ」

電波なことを言い出す青年。……今更か。

「僕は世界に認められた、『物語を紡ぐ者を誘う、人間だった者の一人だ』

「人間……だった者」

「ああ。今の君と同じじゃ。もっとも、そこまで親切じゃなかつたけれどね」

懐かしむように瞼を閉じ、数秒経つて目を開ける。

「僕の場合は、世界からの依頼だ。半ば強制であつたけども、僕は納得し、ここで役割を果たしている。世界を作る物語の語り部としてのね。次の質問は？」

案内人、か。

親切なことだ。

「異世界を包含する、や、異界の門……などと言つていたが、異世界はいくつもあるのか？ あるなら選べるのか？」

「幾つかあると言つておこう。ただしそれは選べない。僕に選ばれた時点では君は僕の案内する異世界にしか行けない」

「それではあなたの案内する異世界では、言葉は通じるか？」

「可能だ。元の世界の言語 を対価に、『新しい世界の共通言語』を得ることになる

「なら言語を複数習得していた場合はどうなる？ 僕も一応日本の高校生だ。英語くらいは最低限できるだ？」

「高校生だ。英語くらいは最低限できるだ？」

矢継ぎ早に質問していく。青年もノータイムで答えを返す。まるでこちらの考えていることが分かるようだ。……分かるのかもしない。

「習熟度に応じて、『新しき世界で滅びた古代言語の知識』を得ることになる」

「その上限は？」

「第一言語を除いた十五ヶ国語以上をマスターすれば、古代言語をマスターしたのと同じになる。君には関係ないけどね」

言葉足らずの質問にも的確に返す。本当に考えを読んでいると見ていい。

「対価を支払えば、望むものを得ると言っていた。同時に、古き世界での死を対価に、新しき世界の生を得る、とも」

「ああ」

「つまりこれは、『元の世界での生活』を払い、『異世界での生活』を得た。そういう認識でいいのか？」

「そう訊くと男はクスリと笑い、

「『』明察。そこに気付く人は少ないんだ」

並べて語られるから、それぞれ別のルールだと勘違いするんだろう。お生憎様、俺はゲームも漫画も小説もアニメも、ファンタジーがあるなら貪欲に見続けた。そこにあつた作者トランプとの心理戦は数知れず。俺自身それを思い付く知能はなくとも、経験則ノウハウだけである程度は看破できる。言語の質問で似たようなものが出たから、これはただの確認だった。

「となると、支払える対価は元々ないに等しいんじゃないかな？」

ニヤリと男は笑つた。

元の生活を支払ったといつことは、新しい生活を得ることを意味する。

仮に大富豪が新たに何も求めなければ、向こうの世界に行くと同時に、向こうの世界での莫大な資産を手に入れる、あるいは、手に入る保障が 知らされるかどうかは別にして あるだろう。

だがもし全財産を対価に、魔法や超能力や、何かを得たのなら。その保証は崩れ去り、無一文で生活することになる。それだけならまだいいだろう。もしその立場が俺なら間違いなくする。

だが、金の切れ目が縁の切れ目、縁の切れ目が命の切れ目、だ。ファンタジーを見るためなら、命なんて安い物。でも、そこで生きるというのなら、その確率は上げるべき。それに、縁なくして一人で騒ぐなど、現実で妄想するのと何の違いがあるというのだ。

しかしそもそも、金が才能を得るための対価になるとは思えない。いくら金をつき込み、恵まれた環境で努力したとしても、眞の天才には足元にも及ばない。それは現実でもそうだし、ファンタジーならもつとそうだ。だから金を対価にするというのは、地盤を固めるくらいにしかならないはず。もし異世界で同等の金を得る保障があるなら、そちらに回すべきだ。実力に任せたギャンブルでもやりたくはない。

いや、もつと言つなら　俺はバイトとかは大学生になつてからするつもりだつたし、貯金なんかは一切ない。本やゲームに消えた。つまり金は財布の中のしゃん、じえん、えんと少し。

……地盤固めにもならねえ。

本やゲームに相当する何かが向こうの世界でももらえるとするならば、それは娯楽品ということになる。だが俺にとつて最大の娯楽とはファンタジー世界そのものだ。この場合どうなるのだろう？ 魔法に関する物でも入手できると考えるべきか？ それならそれで支払う必要はない。

となると眞実、俺に支払えるものなんて何も

「……一つ、聞きたい」

答えを待たず、問いかける。

「記憶つて、対価に払えるか？」

俺の言葉に、青年は目を丸くした。

「え、ええ。払えます。あなたの意識は、それを価値あるモノとして認めています。価値あるモノは、対価となりえます」

「そうか、それなら　いや、今なんて言つた？　『あなたの意識は』？」

すると顔色を変え、弁解するように虚空に向かつて頭を下げた。しばらくすると申し訳なさそうな顔のまま、こちらを見る。

「すみません。世界は続けると仰っています。恐らく、何も変わらないだろう、と」

「……どうしたことですか？」

「己の意識が価値を決める？　その意味を知つても何も変わらない？　この場所で支払う対価とは、常に個人の価値観に影響されるのです」

「……？」

「ですから、万人の従う絶対的な価値観ではなく、個々人の決める『これなら払う価値がある』ものならなんでもいいんです。客觀より主觀が優先される空間がここなのです」

「つまり、その人が大事にしてるモノならなんでもいいってことか」「平たく言つとそうなります。思い出のペンダントでも、お金でも、命であつても。それを大事なモノだと認識し、そしてその上で支払うことができるなら、それは対価となりえます」

「じゃあもし仮に、寿命を何十年分つぎ込んでも、本人が自分の命をどうでもいいと思つていれば……」

「得られる力は微々たるものです」

「ふうー。

一息つく。

考えを纏める。

「元の世界　を対価に『新しい世界』を得たつてのも、俺が考えたからそうなつた？」

「ええ」

「なら、俺の言つた支払える対価がない、つてのは、俺がそういう

認識だつたからなかつたのか？」

「逆に言えば、あなたがそういう認識だつたからこそ、あなた自身の考える《保障》というものがあなたに適用されると言えるでしょう」

まるで。

まるで、道化じやないか。

これだ、これだよ。だから嫌なんだ。

俺は下手に理論で武装しそうだ。あまりに知識を得すぎた。小賢しい思考ができてしまう。そして肝心なところが抜けている。

だから、だから主人公には成れない！

こうした人間が主となれるのは、殺伐とした世界で死に物狂いになるか、周りを従わせて戦う能力を持つかくらいしかない。

違うんだ、俺が求めてるのはそうじやないんだ！

俺は魔法や超能力や神や悪魔や魔物たちと戦い、仲間と共に命を賭け、できれば美人さんと恋をしたい。

だが、俺がこんな思考だからこそ、俺は主人公になれない。邪念があるから、正義の主人公には成れない！

だから、俺がそう成るには、死ぬか、記憶でも失わない限りだめなんだ！

そして、だからこそ俺は物語を作る者として選ばれたのだろう。記憶を支払う人間。そして得る力。案内人すら驚く対価と、その重さゆえ得る多大な力。物語足り得るには十分だ！

俺にそんなこの世界の真理を教えたのも、俺が記憶を捧げるから。それでも絶対的な、心が認める価値は変わらないから。だから、何も変わらない。

「俺の記憶は重いぞ。記憶喪失なんてなつたことないから分からないうが、今の俺にとつては俺の死同然だ。俺の死で、俺じゃない俺にその対価を支払うんだ。安いわけがない。それに俺はファンタジーの為なら命なんざ安いと思っているが、それはファンタジーこそが高いのであって、俺の命が安い訳じやない。

俺の命たる記憶　思い出部分、Hピソード記憶　を支払う！
他の記憶、つまり知識と人格はそのままに、俺を俺のまま思い出
のない俺として異世界に渡らせてもらう！

記憶喪失ネタをいくら見てきたと思つていい。とつゝの昔に勉強
済みだ。

「そしてそこで生き抜くため、　元の世界の常識　を払い、《異世
界の常識》を得る」

「承つた。して、記憶の代わりに得るモノは？」

「俺が求めるのは　」

う、ううん……

なんだ？ 目が……前が、見えない……ぼやけてる……
手の土汚れを払い、指を右目に当てる。そしてつまむと、コンタクトレンズがあつた。

「どうして……？」

コンタクトを外した目は、正常に見えている。目が悪くないのに、コンタクトをしている意味がわからない。カラーコンタクトという訳でもないのに。いや、あれ、俺は目が悪くなかったっけ？

思い出すやうとする。

ツ！

「え……？」

反射的に頭を押さえる。

何故、どうして。

「記憶が、ないんだ……」

茫然と俺は呟いた。

左目のコンタクトも外し、その場に捨てる。このままつけている必要はないし、保存液もない。捨てるしかなかつた。

数分空っぽの頭を全力で動かしてみたが、答えは出ない。

ここでぼーっとするのも考え方だらう。

俺はようやく周囲を見た。

ふむ。

俺がいたのはどうやら道のようだ。と言つても整備された様子はなく、平原の行き来のしすぎで削れてできただけのものようだ。

俺自身、何も持つていない。元々何も持つていなかつたのか、盗賊に気絶させられ盗られたのか、気絶していたから誰かに盗られたのか。

考へても分からることは、忘れよう。

幸い、道の先、地平線の手前辺りに街らしきものが見える。左右は平原、森、そして地平線の彼方に山脈が見える程度で、どう考えても行き先は一つしかない。

だけど

「遠いよなあ」

徒步一時間は覚悟しなければならなそつだ。

街に辿り着いた。

……どうしよう。

何も分からず辿り着き、頼る者なく行きついた。

持ち物はなく、金銭の類は一切ない。

働くこつにも、薄汚れた服を着、記憶の怪しい身分不明の人間を雇つてくれるとは思えない。

八方ふさがりだつた。

……誰か親切な人はいなか、なーんて目を配るが、そもそも俺はそこまで困つた風にしていなかだから気付くはずがない。

しようがない。

怪しまれるのは承知で話を聞いてみよ。

「すみませーん」

「見ない顔だね。新鮮な野菜が揃つてるよ、買つてきな！」

と言つても、通行人に話しかけるほどの度胸はない。相手から望みの返事が返つてくるとも思えない。無難に、店を構える威勢のいいおつちやんに声をかける。店と言つても、街路を歩いていたら両脇に屋台のようないきもの品物が並べてあるだけなのだが。

「ああ、ええと、すみません。働くこつなどありませんか？ 今お金が全くなくて」

「あら、兄ちゃん大変だねえ。財布でもおとしたのかい？」

「ええ……、と口を濁す俺を「またいいことあるさ、落ち込むな！」

と笑つて励ましてくれる。

「残念ながらこの辺りは皆余裕がある訳じゃないんでね。聞いて回つても同じだろ?」

そう軒並み連ねる屋台を示すよつて言ひ。

「だから大人しくギルドに行くのを勧めるが。見ない顔つてんだから、旅の人間だろ? そういう仕事嫌でこっちの仕事探しに来たのかもしれないが、背に腹は代えられん。そつちで仕事してきな」

ギルド 同種の仕事を持つ者たちの組合のことだ。互助組織だつたり、酒店、出入りの管理をする組織だつたり組合によつて姿は様々。

男はその中の冒険者ギルドを指したのだろう。

「え、ええ。そうします……」

言われてみればそんなものもあつた気がする。

「場所を聞いてもよろしいでしょうか?」

「この通りを抜けて右だ。西の街道から来たなら正面に見えるんだが、どうやら兄ちゃんは東の街道から来たようだな。王都まで出稼ぎかい?」「

はははそうですよ、と乾いた笑いでなんとか繋ぐ。

「まあギルドマークの入った看板がよそよりでかいから、一発で分かること思うぞ」

ありがとうござります、と丁寧に礼を言つと、「恥ずかしいわい

!」と豪快に笑つて肩を叩かれた。

「それじゃ、金が入つたらせひうちにー」

しつかり宣伝して、見送つてくれる。

いい人だなーと思いつながら、言われた通り、屋台並ぶ通りを抜け右に曲がる。

「あー、あれかな」

ギルドマークとかいうのに覚えはないが、二メートル近い剣のイラストが描かれた板を入り口の上に掲げてあることから、そうなのではと思う。

少し離れて伺っていると、人の出入りも確認される。西の街道とやらの真正面なのだから、少なくともうかがわしい施設ではないだろ？。

「うしつ、行つてみるか」

小声で自分を激励すると、冒険者ギルドへ。

「こ、こんちわー……」

尻すぼみになる声でいきつしながら、ギルドへと入った。

そこでは、何故か男たちが殺氣立ち、俺を睨んでいた。

「な、なんで？」

殺氣だつた男たちが、得物を抜いて俺に向かつてくれる。

「ひつ、ヒイイイ！」

俺は情けない悲鳴を上げながら、入ってきた扉から急いで逃げる。転がるようにして外に出た。

中から何人もの人が出てくる。

「な、なんで俺に向かつてくれるんですか！？」

俺の悲鳴に、殺氣だつた男たちは答えない。じわりじわりと距離を寄せてくる。俺は尻餅をつきそうになりながらも、なんとか後ずさり。

しかし遅れて扉の影から顔を出した男が答えてくれた。顎鬚の似合うナイスガイだつた。

「なんていうかねえ……」

周りの男たちは未だにじり寄つてくる。ダッシュで逃げたいが、足が動かない。それにそうした瞬間なんかヤヴァアイものが飛んできそうな予感がぴりぴりする。

「うちの姫さんが、『次に現れる男がかなり強い』って予言した後、『お前らじゃ無理だから諦めろつて』って煽つちゃつて。皆姫さんに好かれたいからそいつを倒

男は瞬時に頭を引き、扉を閉めて壁にする。遅れてナイフが数本突き刺さる。

「怖い怖い」

再び顔を出してそう言つと、ギルドの中に戻つていつた。

男たちが襲つてきた訳は一応分かったけども、無茶苦茶すぎる！か、かなり強いってなんのことだよ！ 俺に戦う力なんて……あ、あつた。

彼らから逃げられる気はしない。そして倒す力がある。なら、倒すまで。

何故か俺は、その得体のしれない力というモノに興奮していた。それを見つけた瞬間、逃げるという選択肢が一切消え、それを使いたいという衝動に駆られた。何というか、そう。今まで欲しかったけれど手に入れられなかつた物に、初めて手が届いた そんな、感触。

知識を手繕ると、違和感の塊が存在した。それが俺の持つ力。俺の持つ『常識』に照らし合わせると、この世界に存在しない力だ。だが何故か俺は知つていて、使い方まで分かつてゐる。だからこそ違和感。

使い方はシンプル。

一点を睨み、そこを心の中で捻じる。すると捻じつた場所の空気が歪んだ。

まだだ。

相手はまだじわじわと距離を詰めてくる。

俺は最初に歪ませたポイントの横を捻じり、『歪み』を増やす。『歪み』一つはピンポン球くらいの大きさだ。それで線を結ぶように、等間隔で横に作り上げていく。

最初に作った『歪み』は俺のすぐ目の前だが、俺は後ずさり、相手は前進している。『歪み』は高さ一メートルくらいのところに鎮座し、距離は互いの真ん中。五メートルずつくらいだろうか。急いで仕掛けないと、『歪み』を仕掛けた意味がなくなつてしまつ。

俺は彼らに背を向け、一步踏み出した。

背後で砂を蹴る足音が聞こえる 直後。

「がつ……！」

「ぐふつ」

「うつ……」

俺は横に飛び、後ろを振り向く。予想通りナイフが一本飛んできていた。

走り出した数名が、俺の作った『歪み』の壁に腹からぶつかり悶絶したようだ。『歪み』は宙に浮かぶ障害物。どうやっても取り除けず、動かせない『点』。彼らは走る勢いそのままに、壁にぶつかったようなもの。だが『歪み』は点なので、壁にぶつかるより面積が小さく、その分圧力も大きい。運悪く鳩尾に入った何人かはその場で昏倒している。

先に走り出した何人かが急に止まつたことで、後ろの人間は足を止めざるを得ない。

その間にも俺は再び『歪み』を作り、トラップを仕掛けていく。

今度は斜めに設置。立ち止まつた男たちの両脇から、俺を結ぶ直線に垂直に仕掛ける。

男たちは予想通り、正面で倒れた男たちを避け、両脇からこすりへと走つてくる。

俺はタイミングを合わせ、わざとらしく両手を壁に沿うよう振る。すると男たちは『歪み』にぶつかり、またも足止め。体をくの字に折つて後ろに倒れる。少し走る勢いが弱かつたか、倒れる者は大勢だが、気絶する者はいなかつた。

またそれぞれの脇からこちらを結ぶ直線を妨げるよう『歪み』を作りながら、控え目に声を上げる。

「戦いたくはないんだ。武器をしまつてくれないかな？」

半分は壁に弾かれて倒れているが、運よくそれを免れた出遅れ組もいる。

彼らもこのまま進めば正体不明の『攻撃』をされると思い、たたらを踏む。

だがやはりというべきか、血氣盛んな何人かはそれらを避けてまたこちらに向かう。

俺もまた手を伸ばし、彼らが壁にぶつかる直前、腕を振つて演出する。

三回も攻撃を見せられ、その原因が分からぬ。分かることは精々、その衝撃に合わせて手が振られることと相手は誤認する。

残った男たちは完全に足を止め、両手を上げて無害を示した。最初の血氣盛んな状態が嘘のようだ。仲間がやられる様子を見て頭が冷えたのだろう。

それでもまだ抵抗する気なら、手を振りかぶつて斬つもりだつたが、不要のようだ。下準備が無駄に終わつたが、それで何より。俺はそれぞの『歪み』を見て、ほどけるよう念じる。すると『歪み』は最初からなかつたかのように消え去り、元の空間が戻る。俺がそこを通つてもぶつかることはない。

「危害を加えるつもりはありません。手を降ろし、武器をしまつてください。あと、倒れた人たちの介抱もお願いします」

俺は自然にギルドの扉に向かう。後ろから殴られたり、正面からでも近ければ避けることはできない。相手に背を見せている状況だが、一応街中だしあまり物騒にはならないはず……今の今では信頼性に欠けるが。だが怯えてしまつては、こちらのタネがバレやすくなる。余裕そうに振る舞うことで、攻撃を躊躇わせることができるはずだ。

その甲斐あつてか、後ろから もちろん前からも 攻撃されることはなく、無事にギルドへ辿り着くことができた。

完全勝利の瞬間。

頬が俺の意思を無視して釣り上がる。

幸い扉は目の前。誰にも見られていらないだろつ。

俺は顔を片手で一揉みして元の表情を取り戻す。

深呼吸。

では行こう。

今一度ギルドの扉を開く。

先ほどのように殺氣だつてゐることなく、「本当に生き残つてゐる」という感嘆の声が聞こえてくるほどだ。

居心地悪く出口で突つ立つていたが、先ほど顔を見せた男が「こ

「ちに来なよ」というので、そちらに向かってみた。

冒険者ギルドは酒場も兼ねていて、あちこちのテーブルに酒や料理が置かれてあった。

俺は男のテーブルの隣に立ち、声をかける。

「えーっと、説明ありがとついざいました」

男は食べていたパスタを置き、「どうも」と言つて向かいの席を指す。従う俺。

「あなんだ。不運だつたね」

確かに不運は不運だが、先の説明を聞く限り『姫さん』とやらが

元凶な気が。

「あの、先ほど言つていた『姫さん』と言つのは?」

分からぬことは素直に訊くのが一番だ。何も知らない状態で駆け引きできるはずがない。

「うん、まあそれは本人に訊くのが一番だろ?」

「?」

首をかしげる。しかしすぐ隣でコトリと音がすると、十五、六歳くらいの少女が椅子を持って俺の隣に運んでいた。

少女と目が合つ。

「こんにちは!」

「い、こんにちは……」

少女のにまつーという擬音語の似合つ、天真爛漫な笑みと挨拶に、俺は目を逸らし、詰まりながらなんとか返す。

「や、姫さん。こいつが『予言』に出たやつでいいんだよな?」

「はい、たぶんそうなのです!」

「の子が『姫さん』? じゃあわつきの男たちは……

「口コ……口ン……?」

「冗談だよ。真に受けるな」

男が笑いながらツツ「口ミを入れ、俺を見定めのように覗き込む。

「ガルムと呼ばれている。こっちは

「ランです。よろしくお願ひします!」

元気よく答える少女。

ガルムがお前は、と問いつてくるような目を送つてくる。だが、答えることはできない。

「……」

どうしようか迷つていると、ランと名乗つた女性が首を傾げる。よくよく見れば美少女な訳で、首をかしげる様はかなり可愛い。

「名前、なんて言つんですか？」

「え、えつと……」

名前、名前……名前なんてあつたか？　いやないね。
じゃあ偽名は？

ガルム？　ラン？　これに沿うような名前？　頭の中はもつと非凡で、聞き慣れた『名前』ばかりが並ぶ。

くそ、どうしたら。

偽名、名無し、眼に宿る力、歪み　記憶喪失、魔眼……

「な、ナナメ！」

気付いたら、

「ナナメって言つんだ。よろしく」

『ナナ』シと『メ』ニヤドルチカラから、ナナメ。

アクセントの違つ、関係のない意味の言葉が頭を過ぎつたが……
もう遅い。

眼（後書き）

最後の名前決定、「生死の境」で語られた内容に矛盾してゐるようですが氣のせいです。
……氣のせいです。

「よろしくー。」「

偽名ホウメイというにも違和感が拭えない名前を、疑いなく信じられるこの娘ムネが怖い。

男の方は何か考えるような顔をしていたが、まあいかと言わんばかりに目の前のパスタを食べ始め、

「お前も遠慮するな」

と俺にサラダを勧めてくる。隣の少女は俺の前にあつた皿を取つて、パスタを食べていた。

たぶん……

俺がやつてくるのが見えた 新しい椅子が必要 ランが椅子を取りに行く ガルムがランの椅子を俺に勧めてしまった 仕方なく自分は新しい椅子に座つた。

……だろう。きっと。

なんだかいつも以上に妄想力 改め妄想りょ……うん、妄想力が逞しい。俺の思考は俺に想像力という言い訳すら「えてくれないようだ。あといつも以上つて何よ、いつも、つて。

「あの、俺お金ないんですけど……」

サラダを勧められるのはいいが、払う金がない。この人も請求するつもりで勧めたんじゃないだろうが、一応言つておかなければ。礼儀、大事。図々しく始めるのは俺の主義じゃない。

「ならなおのこと喰え

「そうです、食べてください

「……どうも」

一人が勧めるので、ありがたく 皮肉は一切なしに 頂くことにする。お箸もフォークもなかつたのでつまむ羽目になりました。しゃきしゃきのサラダが……うん、普通。

さすがに一人素手でつまみ続ける気もないでの、カウンターにフ

オークをもらいにいく。木彫りで手作り感があつていいなと思った。

戻りながら、二人の様子を窺う。

ガルムさんは、さつき見たとおり顎鬚の似合ひナイスガイ。眼の色はなんと言えばいいのだろう。狼を連想させるような黄色がかつた銅の色、だろうか。あまりそういうのは詳しくないので分からぬい。髪は黒でそこそこ伸びている。サングラスがあれば完璧だと思う。

対してランは、お姫様と呼ばれるのも納得な、朗らかで愛らしい表情をしている。円らな瞳はグレーで、長い髪はブロンドのストレート。顔もお人形というような言葉が似合ひ。

俺が見ているのに気付いたのか、ランは一コツと笑つてくれた。
「うつ……何もしてないのに心が痛い。

「ああそうだ、姫さんが煽つたとか言つてませんでした？」

だからどんなD女が出てくるかと思っていた訳なんだが、こんな純真無垢な少女（対して年齢変わらないだろうけど）で驚かされた。

「ああ、それも嘘だ」

「オイ」

人を食つたような態度にツツコミを入れる。しかしこの男、堪える様子はない。ナイスガイとか褒めた俺に謝れ。

「じゃあどうしてあの人たちは襲つてきたんだ？」

ギルドに戻つてきた人たちを指して訊く。

「ああ……カルシウムが足りてないんじゃないのか？」

「ガルムがつづついたんでしょ！」

ランがガルムに怒る。

「この人つたら、『賭けをしよう。次来る男に勝てたら金貨をやる。負けたらプライドを売り飛ばせ』とか言つて、の人たちを焼きつけたんですよ」

似てない声マネをして、むうと言わんばかりに頬が膨れ上がるラン。

「ランの言つ言葉だけで、あそこまで殺氣立つとは思えない。もつと罵詈雑言を吐いたんじゃないだろうか……。恐ろしい。本当に俺に謝れ。

「いいじゃねえか、勝てる勝負だつたんだから。お陰であいつらの面田丸つぶれ。バカどももこでいい顔できないつてな」

せせら笑うガルム。ガイつて感じの印象はもう欠片も残っちゃいない。ただ、それでも絵になるこいつもこいつだ……妬ましい。

「そろそろ本題入つていいですか？」

なんかこの男に遠慮するのも嫌になつてきただので、俺はさつあと本題に入ることにする。

「『予言』つてなんですか？」

「私の『力』ですよ」

「力？」

「はい。と書つても、『継承』したものなんですねけどね」

『継承』？ 誰かから受け継いだの？

俺が疑問符を浮かべていると、それを察したのかガルムが問うてくる。

「どうした？」

「え、えーっと……」

何も覚えてないんすと答えるのは簡単だが、さつきバカみたいに偽名を名乗つたばかりだしなあ。ええい、ままよつ。

「俺、名前以外全く覚えてない訳でして」

かくかくしかじか、と言つほどのことはない。とりあえず名前だけ覚えてたという嘘をついて、起きたところから今までのことを全部話した。もちろん、襲われた恨みをふんだんに込めて。

「そりや大変だつたな」

「大変だつたんですね……」

「オイ前のどうでもよさそうな奴。オイ後ろの頭回つてない奴。もう嫌だ……」

「そーゆー訳でして、この世界について聞かせてもらえませんか？」

かつたりい、と面倒そうな顔をするガルムと、喜んで、と嬉々として話し始めるラン。ずっと思つてたけど、なんでこの一人一緒にいるんだ？

「ナナメさんは、この世界に『上の世界』からやつてくる人間がいることを知っていますか？」

「上の世界？ 日本とか、アメリカとかがある世界のことだらうか？」

「えと、たぶん。あと呼び捨てでいいよ」

「そう言つとランは『えーと……』と躊躇い、

「ナナメ……さん」

ハーダルが高かつたようだ。

俺は苦笑して、続けて、と流した。

「上の世界の人間は、この世界に降りてくる時『案内人』に出会います。そこで『力』を望めば、対価を支払うことでそれを得ることができます。できるやうです。そうして降りてくることを『降臨』と呼んでいます」

ああ、それなら『上の世界』つてのはさつきの認識であつているな。

「そして昔から今に至るまで、何千何万という人が『降臨』したわけなのですが、そこで戦人の多くがあることに気がついたのです。『降臨』した者が得た『力』というのは、必ず何かに受け継がれているということに」

「……？」

「ある人が得た『魔法の才能』は子供に受け継がれ、またある人が得た『新しい武術』は弟子に授けられ、『強力な剣』ならば持ち主から奪い取つた人が使い、またその人から奪い取つた人が使う、という風に。受け継がれるというより残されていると言うべきかもしれません。『財産』などは使えばなくなるのですからね」

才能も、武術も、剣も、金も、なんらかの対価を支払い、そして得たもの。仮に 対価 と『力』が等価ならば、『力』は残される分、二人目以降は純粹なプラス。三人、四人と続けていけば、それ

が無形物の場合ならば顕著になる。結果、プラスマイナスゼロではない……？

「何故そうなるのか、正確なところは分かっていません。ただ『案内』が世界に物語を満ちさせるため『案内』をしていることを考えると、世界に『物語』を作るための基盤作りでは、と言われています」

話がややこしくなってきた。ただ、意外なことに頭の中ではそれに対する答えが既にあった。

世界は物語で成り立っている。

そのために世界は、閉じた世界の外側から、新たな因子を取り入れる。

だから世界に因子は残る。

だから『力』は受け継がれる。

「そしてその『力』の、特に希少性の高い力を継いだ者は『継承者』と呼ばれます」

「それがランというわけか」

「はい」

ちょっと整理させてくれ、と腕を組んで唸る。

数十秒の思考の末、

「ハア……」

思わず口から溜め息がこぼれた。

「どうしたんですか？」

「いや、どうにも分からなことがあります」

「それと聞いてばかりな自分が情けなくて」

「なんですか？ なんでも聞いてください」

「いや、そういうんじゃなくて、道理として分からな話。」

「どうして俺が記憶を持つてなくて、『力』を持っているのか。いくら考えてもきっちり嵌まる答えがなくて」

肩を竦める俺。

「ナナメさんはどう考へておられるんですか？」

「うん、まずは盲点から考へていった」

「盲点？」

まあ気付いてたら盲点じゃないからな。

「と言つても、俺の盲点じゃなくて、漫画やゲームの主人公がよくやる盲点」

疑問符を盛大に浮かべるラン。これだけだとよくわからないだろうから続ける。

「記憶喪失って、物語のキーになることって多いからな。傍から見たらフラグが乱立してあからさまなのに、何故か主人公たちってそれをつなげられない。仕方ないとも思うけど、俺はそういうのを思つからね。気付く限り、王道に対するメタ行動をさせてもらうよ。

こういう特別な人の話を聞いたら、聞いた本人は『そんな人いるんだー』って他人事で済ましてしまう。本当は記憶喪失のお前もなのに そんな感じに進むのが主人公だと思うんだよね』

「????」

「ああ、俺が主人公だつて言つてる訳じゃないよ。そんな熱血的な、運の強い人間になつた覚えはないからさ。

何が言いたいかつていうと、俺はその可能性を考えて自分のことを振り返つてみた訳。そしたら矛盾にぶつかった」

ランは俺の言葉についてこれていないようだ。

「何か質問ある？」

「まんがやげえむつて何ですか？」

そこか、と自分の迂闊さに苦笑。

「マンガはイラスト仕立てで進む物語。ゲームは……説明しにくいな。テレビとか言つても伝わらないだろうし……」

冷静に考へると、ゲームというものの不可思議さが知れるというのだ。

「説明が難しいね。言つてしまえば『音や映像に合わせて操作する

遊び『 だろうか？ 僕が今回言いたいのはそれにストーリーをつけたもの……だけど、忘れてくれていいよ』

縁もないだろうしね、と付け加えると、ランはそれで納得したようだ。

「ではふらぐやおうじい、めた行動とはなんですか？」

質問を重ねてくる。……少し発言がマニアックすぎたようだ。

「……ごめん、次から言葉を選ぶことにするよ。

フラグってのは、言うなれば使い古された設定、あるいは前触れかな。いや、ちょっと違うか。

いいや、具体例を挙げよう。まずストーリーの最初に『お姫様が攫われた』としよう。これをフラグとすると、次の展開がいくつか想像できるんだ。代表的なもので言えば『赤い帽子の配管工が助けに来る』……今は忘れて（言つてる俺が分からぬし）。気を取り直して、『王子様が助けに来る』を挙げることができる。お姫様が攫われた以上、誰かが助けに来るという流れがなければ話として成り立たない。だから次の展開を決定づける出来事のことが『フラグ』。一応付け加えるなら、普通の人は使わないので安心して「なるほど……」

真剣に頷くランを見て、下らないことを吹きこんでしまったと自己嫌悪。

「王道つてのは、物語でよくつかわれる基本的な展開。

メタは超越したつて意味だつたはず。今回言いたいのは、王道つまりよく使われる展開とは違う行動をとりたいってこと。他に何か質問がなければ元の話に戻す 前に「

下らないことを喋り続けたせいで、喉が渴いた。ちょっと水をもらつてくると言つてカウンターの前に立つ。水の入ったコップはこちらも木製で、グラスじゃないことに激しい違和感を覚えるが、これが普通だと常識が訴える。違和感は常識に負けました。

テーブルに戻りながら、考えに耽るランを見る。可愛い顔に皺を寄せ考える様は、まるで……まるで……女神のようだ。いい喻えが

思いつかなかつたので安易な言葉に頼つてしましました。『めんな
さい。

「で、質問ない？」

「大丈夫です、続けてください」

続き促すランに、水を得た俺の舌は滑らかに語りだす。

「もし俺が記憶喪失だつた理由が、『《超越者》になるため、記
憶』を対価に支払つたのだとしたら』、といつ前提で話を進める。
まあ現段階で一番ありそうだと思うし、謙虚な人間や『主人公』

つて奴ならそういうのが一番盲点になりやすいからね」

ずっと黙つてるガルムを不思議に思い、初めてそちらを意識した。
見事にいなかつた。音も動く気配もしなかつたが、俺の能力がそこ
まで優秀なはずはないから、見逃したのだろう。あるいはあちらが
気取らせないよう動いたか。どちらにしろここにはいない。さて、
どこに行つたのやら……

「それで思った矛盾なんだが、一つは俺が自分の記憶を対価に支
払うとは思えない」

「どうしてですか？」

「簡単な理由でね。記憶喪失つて言葉にするは簡単だけど、それは
その人の死と同義だと思つから」

並行世界が存在する、そう仮定する。そこで自分が並行世界の自
分と出会う。そこで出会つた相手は顔も名前も人格も同じだが、自
分は相手の考えていること、記憶していることを知ることはできな
い。並行世界の自分とは、果たして本当に自分なのか？

自分は相思相愛の相手がいて、その人と死別した、と仮定する。
そして自分はその後、愛する者との死別を乗り越え、また新たな相
手と関係を築き上げた、とする。さてこの状況で死者の蘇りという
ものが存在する、と仮定しよう。死者は蘇り、自分は過去愛した女
性と出会つた。さてその時、自分はどちらの女性を選ぶのだろう
か？

記憶喪失なんて、それらと同じこと。

認識できない自分は自分なのか？　過去の自分と現在の自分は同じなのか？

だから俺は、記憶なんて大それたもの、対価に支払うとは思えない。感情が昂つてつい言つてしまつたとか、自分の死を対価にしてでも得るべき何かがあつたとか、そんなことがない限りは。

「だから俺が、自ら望んで記憶を捧げるとは思えない。

理由その一。知識になにか齟齬がある」

「ソゴ？」

「ああ。その前に一つ質問なんだけど、『神様』と出合つてからこの世界に降りてくるんだよね。その時、『神様』から何か与えられたりしないの？」

少女はえと、と様子を見るように語りだす。

「ほんとないと聞いています。唯一やることと言えば、元の世界の言葉をこの世界の言葉に直すことくらいのようです」

「うん、なら俺の推論通り、かな。この話の前提是『俺が記憶を払つた』ということ。だが、俺は見ての通り聞いての通り、結構悪知恵の働く人間でね。もし俺が記憶を払つてまでこの世界に降りてきたのなら、同時に記憶がない状態で生きられるよう、なんらかの補助を入れると思うんだ」

「……？」

首をかしげるラン。だが俺はまだまだ饒舌に語りだす。妄想が止まらない。そしてこんなのを静かに、呆れる様子なく聞いてくれる人とも久しぶりに出会つた　気がする。

「対価で『力』を得るなら、そこに『記憶を失つたが、そのことに納得する』という結果を加えるか、記憶を失うことには承する今の記憶は失わない　という前提を付け加えるはずなんだ。得るもののが『力』になるもの限定なら、後者だろうけどね。

それでなくとも、俺の持つている知識はどこか半端だ。頭の中を探れば、さつき外で使つた『力』の知識や使い方は出てくるけど、原理やどこで手に入れたかは全く出てこない。ここにたどり着いた

のも『冒険者ギルド』の話を聞いたからなんだけど、でもギルドといつ存在の知識はあった。なのに『超越者』や『継承者』なんていふ、知らない単語が出てくる。もし本当に知識を『力』として得たなら、こんな不完全にするはずないんだ。やるならもつと徹底的にする。だから『俺が記憶を拝った』といつ前提は間違い

「なるほどー」

結構難解な話をしたつもりなんだが、先方は全く気にしていない。理解しているのかいないのか。

「それではナナメさんは『継承者』でしょうか？ ギルドは知つて当たり前ですが、『超越者』や『継承者』なんて言葉は、騎士や冒険者みたいな戦いを専門にする人間しか知りませんからね」

……分からぬこともない。財産を継承しても、あるものを継ぐのは当たり前。美しさを継承しても、遺伝子を考えれば違和感はない。戦いの技能、それもとりわけ特殊なものでなければ、継いだとも意識せずに継いでしまう。だからそれに気付いたのは戦闘にかかるような人間だけ。

「確かにそうかもしけない。でもね、俺には上の世界の知識もある。だから『超越者』と『継承者』、どちらかといふと『超越者』よりも

だ

ランに話したことで、答えが絞り込めた。

「論点は三つ。俺の性格、知識、技能。それ考えしていくと、答えは一つ……あ、いや、三つに絞り込むる」

わくわく、と次の言葉を期待するラン。

「一、『魔眼』を持つて『超越者』となり、しばらくこの世界で生活したが、なんらかの要因で記憶喪失になつた。

二、俺は上の世界からの人間であつたが、元『魔眼』の持ち主から『魔眼』を受け継ぎ、なんらかの要因で記憶を失つた。

三、この世界に住む一般人であつたが、何らかの要因で『魔眼』を持ち、その時記憶を失つた。同時に上の世界の知識が流れ込んだ。

「の三つだ」

一は記憶を支払わない俺と、上の世界の知識と《魔眼》を持つことからの予想。

一は一の《超越者》が《継承者》に変わっただけのパートーン。

三は《魔眼》こそが諸々の鍵を握っているという予想。論点を挙げていつたら思いついた。

「一は俺が《超越者》、一は《継承者》、三は力には対価が必要だろうって考え方から。絞るのはここまで。

……ふう。聞いてくれてありがとね」

俺も俺自身の素性を予想できてよかつた。寝る前に一人でうんうん唸るとか、寂しい。

「いえ、こちらこそ。おもしろい話ありがとうございました」

丁寧に頭を下げるラン。いい子だなあと改めて思つたところで、

「話は終わつたか？」

ガルムが現れた。

「はい！」

元気よく返事するランと頷く俺。ガルムは椅子には座らず、立つたまま話を続ける。

「こつちは仕事ができた。お前のお守りもこれまでだ。王都まではそこの少年にでも連れてつてもらえ」

そう言つて肩に提げた剣を示す。一メートル近い長さの大剣が背負われていた。その大きさと、それを平然と提げるガルムに驚きの表情を隠せない。

その俺のマヌケな顔を見て何を勘違いしたか、ガルムが「オイオイ」と呆れるように、皮肉るように言つてくる。

「俺がタダでメシを食わすと思ったのか？あのサラダは姫さんのお守り代だ。足りない分は講義代だと思つとけ。あと自分の金ないのに水も頼んでたし、文句はないよなあ？」

「クッ！いい人だと思った俺に謝れえ！」

「え？」

ラン、お前は悪くない。悪いのは全部そこの男だ。

「つて水、タダじゃないの？」

俺の言葉に怪訝な顔をするガルム。

「当たり前だろ。一部の流域ならともかく、王都への休憩地として作られたこの街に、水が余ってると思つてんのか？」

水と安全はタダ。そういう考えが、頭のどこかにあったようだ。

「あ、あの……ナナメさん？ 嫌なら別にいいんですよ？」

悲しげな顔で聞いてくるラン。潤んだ瞳が反則すぎる。

「いや、そうじゃない、あの男に嵌められたことが悔しいだけなんだ……」

そう言つとランは一ぱーっと笑い（あれ、それはそれでどうなんだ？）、

「お願いします！」

俺の手を両手で握りしめる。

「お、おう……？」

俺はそんな、肯定とも否定ともとれない言葉を、疑問交じりに返すしかなかつた。

「どうしてこうなった」

- 1 嵌められたから。
- 2 泣に負けたから。
- 3 自分のためになりそつたから。

答へは全部です。

腹立たしい男がいなくなつた後、俺はランに問うた。

「どうして俺を同行者に？」

「予言に出たからです」

予言。 そう、 肝心の話をしていなかつた。

「その予言つて、 一体どんな『力』なんだ？ どうこう風に俺が出たんだ？」

ん、 とランは頷き、

「ナナメさんになら教えてもいいですよ」

その前に場所を変えましょう そう言われ、 立ちあがり進んだ
ランの後に続く。 ランは料理を出しているのとは別のカウンターへ
向かい、 そこで幾つか言葉を交わすと、 関係者以外立ち入り禁止な
雰囲気のする奥の扉へと向かう。 いいのかとしり込みをする俺に気
付き、 手招き。

大人しく付いていくと、 彼女は勝手知つたる様子で廊下を進み、
一室へと入る。

「ここは……？」

「ギルドの面会室です。 防音効果も高いですし、 誰も入つてきませ
んから、 内緒話もし放題です！」

カウンターで一言一言告げただけでこんな部屋が使える。 ひょつ
とすると、 姫つて言葉は本当本当なのかも知れない。

部屋は木でできているからか落ち着いた印象を与えてくる。 中央

に革張りのソファと木机。それを横から見下ろすように、仕事机が置いてある。面会室というのに間違はないようだ。

周りには調度品がいくつか。壁際に置かれた観葉植物、仕事机の上の花瓶に入った花。それらは窓のないこの部屋にやすらぎを与えてくれる。防音効果も高いと言っていたし、飾り気のない部屋に華を添えたといったところか。

「ナナメさん、遠慮しないで座つてください」

立ち止まって部屋を観察していたのだが、ランには遠慮しているように映つたようだ。俺は頭を軽く搔きながら「ごめんごめん」と言つてランの対面に座つた。

「えと、それじゃ聞かせてもらひつけ、ランの『予言』の力って一体どういうものなんだい？」

少し躊躇うように聞いたが、ランは笑顔で頷き話し始めてくれた。

「『予言』の力はですね……」

曰く、未来を知る力であるといつ。

……分かつてるよ！

具体的な内容だが、彼女の『予言』とは「予め言つ」となのだと言つ。なんだそりやと思つたが、話を聞くと確かにその通りだなと納得した。

彼女の力は、「予め」、つまり、前もつて「言つ」のだ。

何を？

未来を。

ただし彼女の力の発現は運任せのようで、歩いている時ふとしたり、会話中に突然予言を始めたりと苦労している様子。少なくとも自分の意志で押さえることも始めることもできない。

肝心の内容だが、ランのことだけを予言する、といつ」と以外は極めてランダムのようだ。ランダムというのは内容にしてもそうだし、未来に関してもそうだ。予言して「数秒後、スリに会つ」や、「五十年後、湖の畔で転ぶ」といったでもいいことまで様々。その中でもとりわけ衝撃的だったのが、先ほど酒場で口走つた

扉を開けし者、無双の『力』持つ運命の人である」といつものだと言つ。

「……その予言つて、信頼できるもんなんだよな？」

「はい！今まで外れたことは一度もありません」

困つた。何が困つたつて、こんな可愛い子に結婚を迫られて顔がにやけて困る。ふふふ、ふははははは…

「冗談は置いといて」

小声でボソッと戒めるように言つ。

「力つてそんだけ？それならわざわざここまで話すようなことじやないんじや？」「

その予言が原因で俺は入り口で死の危機に瀕した訳だから、そのことはあの酒場の人間たちは知つているはず。それでもここで話す必要があるとすれば……

「実は、『予言』には一つ秘密があるんです」

「……今なら間に合うと思つんだけど、俺に教えちゃつていいの？」

「はい。ナナメさんは、運命の人ですから」

……眩しい。眩しそぎるよこの子。

俺が自身の汚さを再確認している間に、彼女は俺の隣に座つて腕を組んだ。

顔が赤らむ。俺と彼女。

「私の『予言』は、私以外もでき　　『沈む日は、汝を死に導く』」

一瞬言葉が区切られた後、無機質な声色が隣から伝わってきた。思わずそちらを見ると、ランの目が光を失い、口が事務的にそんな言葉を紡いでいた。

す　　と目に光が宿り、ランは自分が口にした言葉を恐れるように再認した。

「死……？」

「オイ！」

ランの肩を掴み、ソファに押し倒すように彼女と目を合わせる。

俺は今、野獣のような目をしていただろつ。自分で興奮してい

るのが分かる。

「お前の予言は、書き換えられるのか?」
びくつと、ランは体を縮ませる。

「あ……え……?」

俺はそのままじつとランの言葉を待った。

「わ、私の『力』は、私と私が触っている相手のことを予言します
が……」

その先の言葉を口にするのが恐れしこども声一つも漏らさず口を噤む。
俺は眼で無言の催促。

嘘だろ?

嘘なんだろ?

俺は、こんなところで死にたく……

「予言が覆されたことは、一度もあつません」

パニックに陥った俺は、あの後ギルドから飛び出していた。
かといって何も持たない俺に、行くあてなどある訳がない。街の中を駆け回り、人目の付かない建物の影に落ち着いていた。

「死……か」

ふと、その言葉が口を突いた。

『沈む日は、汝を死に導く』

予言を思い出す。

簡潔で分かりやすい言葉だ。

改めて見れば、なんといふことはない。

俺が死ぬ。

それだけ。

ふと今までのことを思い返す。

……何もなかつた。

俺は記憶喪失なのだ。思い出すものと言えば、今日の記憶だけだ。
気が付いたら道端にいて、街を手指して一時間。

金を工面すべくギルドを目指し、ガルムの所為で喧嘩を吹っかけられる。

そしてランと話して……終わり。

言葉にすれば三文で終わる『俺』の人生。

たつたこれだけなのに、記憶じやないどこかが死にたくない、死にたくないと叫んでる。

生への執着だけじやない、もつと別の濃い理性といふべき何かから……。

「俺が死ぬまで……後少し」

影から少しだけ、日を見上げる。

空は赤く、日は沈みかかっていた。予言が本当なら　本当、なんだろうな　日が沈んで俺は死ぬ。

「ん？」

待てよ、言葉に釣られて肝心なことを聞いていなかつた。

俺はどうやって死ぬんだ？

予言といつ『力』が丁寧に教えてくれるとは到底思わないが、そこにヒントはなかつただろうか？

「『沈む日は、汝を死に導く』……」

予言を復唱すると、頭が違和感を訴えた。意識して理解に努めたからだろう。一度聞いただけでは分からぬ、なんとも言えないニュアンスの違いがあつた。

「ああ……」

思考の末、その違いの意味にたどり着く。

俺は勝手に今日の日が沈む頃に死ぬと思いこんでいた。そこに「導く」という言葉が加わって違和感になつていていたんだ。導くという言葉は、もつと動的なもののはず。『答え』ではなく『流れ』。

その言葉を、俺は死ぬ、ではなく、俺が死に近づく、と、考えられはしないか？

そして、「沈む日」というのは、本当に時間を指しているのか？それが『原因』だとは考えられないだろうか？

沈む日が、あるいはそれに起因する行動が原因で、俺を死に至らしめると。そう考えることはできないのだろうか？

さりに言えば、「沈む日」というのが何らかの隠喩である可能性も高い。

つまり予言の勿体つけた回りくどい言葉で端的に表された結果が

『沈む日は、汝を死に導く』。

俺の死は、確定じやない。

少なくともまだ、幾許かの余裕はある。

俺は体に活力が漲るを感じた。

近いうちに死ぬかもしれない。だけど、それ以上にこの場にいることがなんとも素晴らしいことのように思える。どうやら記憶を失う前の俺はそういう人間のようだ。生きることって素晴らしい。パシッと小気味のいい音を、合わせた拳と掌で鳴らす。

「生き残る」

今の目標。

記憶を持たない俺の、最初の目標。

成るようにしか成らない。

それが予言というのだ。

逆に言えば、為しても成るし、為さずとも成る。

そこには絶対に違いがあるはずだ。なら俺が目指すべきは、予言を予言のまま、俺の都合のいいよう変えること。

俺の思惑で、予言を、未来を変えて見せる…

「くはっ。やる気、湧いてくるぜ」

ハハ。勝手に絶望して、一時間経たず自己解決。そしていつの間にかやる気満々。

飛び出していったのがバカみたい。

いや、バカだ。

どう考えてもバカだ。

そして俺が思いついた予言の落とし穴。ランも気付いていたのだとしたら、話を聞かず出て言つた俺は大馬鹿もの以外の何物でもない。大恥だ。

なんというか、俺は肝心なところが抜けてるようだ

「やれやれ……」

バカはバカラしく、一度無様に謝りますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4773r/>

異界の界

2011年6月18日15時57分発行